



薬剤師の社会学：
調査から見た薬剤師のジェンダー化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中坂, 有見子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004806

投稿論文

薬剤師の社会学 ——調査から見た薬剤師のジェンダー化——

中坂 有見子¹

はじめに

本稿の目的は、薬剤師という専門職としての職業のあり方を薬学専門大学の卒業者への調査から問い直し、ジェンダー視点からの考察により、専門的能力発揮のための課題を抽出することである。

薬剤師は、女性の多い専門職である²。一般的に薬剤師は女性に適した労働であるという理解は社会に定着し、女性にとって有利な仕事と見られているのではないだろうか。

しかし、筆者自身の就労経験を思い返したとき、実態は必ずしもそうではなく、女性だけ地域限定正社員として採用する、社章を貸与しない、仕事に必要な研修をしない、お茶汲みをさせるなど、専門職としての自尊心を傷つけられるような、女性であることを理由とした不当な扱いが横行していた。その一方で、仕事に対し意欲の乏しい女性薬剤師も多いため、意欲的な薬剤師には負担がかかりがちであった。

加えて、薬学生の就職活動時、一番人気の就職先は薬剤師免許を取得するにもかわらず薬剤師免許が不要の製薬企業だった。薬学生が大学で勉強し国家資格の取得に至るまでに獲得した薬剤師の専門性が社会で存分に活かされているのか疑問に思われる状況であった。

それでは、薬剤師資格を直接に活かして働く調剤薬局の仕事はどうであろう

¹ 本論稿は、2017年1月19日に大阪府立大学人間社会学研究科に提出した筆者の修士論文を元に執筆したものである。修士論文提出時点の主な筆者の就業経験として保険調剤薬局の薬剤師1年7カ月、製薬企業10年5カ月がある。

² 厚生労働省が実施した「平成28年医師・歯科医師・薬剤師調査の概況（厚生労働省2017）」によると、平成28年12月31日現在における全国の届出「薬剤師数」は301,323人で、「男」116,826人（総数の38.8%）、「女」184,497人（同61.2%）となっており女性比率が高い。

か。現状においては、調剤報酬点数の加算などの利潤を追求する経営方針のもと、薬剤師がその専門的能力を十分に発揮できていない状況にある。本来の薬剤師の専門性を十分に発揮するためには、薬剤師の職場環境にも、薬剤師の意識にも、解決すべき課題が多いのではないだろうか。

薬剤師は現状においてどの程度仕事に満足しているのだろうか。薬剤師は本来の専門性を十分に発揮できているのだろうか、また、専門性を発揮できていないとしたら、その背景にはどのような労働実態や意識があるのだろうか。本稿は、このような疑問について、独自調査から解明することを目指している。

論文の構成は以下のとおりである。1において先行研究を概説する。2ではA大学卒業生を対象に実施したアンケート調査概要を述べ、3では調査結果から得られた薬剤師の労働実態、および職場環境や仕事内容についての意識を明らかにし、4では1～3で得た知見から、薬剤師の労働実態にはどのような背景があるのかをジェンダーの視点より検討し、薬剤師が本来の専門性を十分に発揮できるためにはどのような課題が存在するのかを考察する。

1. 先行研究

薬剤師の労働環境および実態、満足度についての調査研究は管見の限り非常に少ない。中込啓一らが企業型調剤薬局に勤める保険薬剤師にアンケートを実施し取得した1,585件の調査報告³を三本、2009年～2010年に学会発表しているのみである。

これら学会発表において、企業型調剤薬局に勤める保険薬剤師のうち「90%の薬剤師は、現在の職場に満足する」という報告がされている一方、「現在の薬局で定年まで働きたい薬剤師は、7.6%のみ」（中込ほか 2009a: 160）であった。また、割合の記載は無いが、企業型調剤薬局に勤める保険薬剤師のうち「現在の会社の満足度」は非正社員の女性で高いにもかかわらず「正社員男性の5割以上が5年以上長期勤務を希望し、一方、女性は雇用形態にかかわらず5割以上が短期あるいは未定と回答」するなど、「保険薬剤師の属性による

³ 性別（男女）や雇用形態別（正社員、非正社員）に分析を行っているが、具体的な構成人数、比率は未記載。

就業意識の違いが検証され」ていた（中込ほか 2009b：268）。また、企業型調剤薬局に勤める保険薬剤師の5割以上が「現在の会社の不満な点」として「職場環境」と回答した（中込ほか 2010：494）。

薬剤師は、職場の満足度は全般的に高く、特に非正社員の女性で会社に対する満足度は高いにもかかわらず、長期勤務を希望する割合は男性が高く、女性は低い傾向を示した、という。しかしこの報告では、本研究の主要な関心である職場環境の実態や仕事内容についての意識の詳細は特に示されていなかった。

薬剤師の人数は、薬学教育6年制を制定後初めての薬剤師が誕生した2012年から2016年の4年間で21,271人増加^{4,5}し、今後も増加する傾向にある。薬剤師になるための教育年数は6年に延長され、薬剤師職の社会的需要は高いが、この報告のように職場環境には不満があるという結果も出ており、より詳細な調査が必要であると思われる。しかしながら、現時点で管見の限り日本薬剤師会は薬剤師の労働環境や意識についての調査報告を行っておらず、日本の薬剤師の現状については厚生労働省が二年に一回報告する「医師・歯科医師・薬剤師調査」においてごく基本的なデータが得られるのみである。女性が多い職種にもかかわらず男女の違いに注目したジェンダー視点からの考察もなされていない。このため独自の調査研究によって、薬剤師という女性の多い専門職の実態や意識を明らかにする意義があると考えに至った。

2. 調査概要

本調査は、薬学を専門とするA大学同窓会事務局から名簿の提供を受けて2016年1月18日（月）～2月29日（月）の期間中に郵送法で実施した。調査対象は、社会人となり昇進・昇格、育児等の多様な職業や人生経験がある世代を対象とするため、調査時点において45歳から52歳の世代である1990～1992年卒

⁴ 厚生労働省（2015年12月17日）「平成26年医師・歯科医師・薬剤師調査の概況」医師・歯科医師・薬剤師調査。 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/14/>（閲覧日：2016年2月14日）

⁵ 厚生労働省（2017年12月14日）「平成28年医師・歯科医師・薬剤師調査の概況」医師・歯科医師・薬剤師調査。 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/16/index.html>（閲覧日：2018年8月22日）

業・修了生とし、746人（女性466人、男性277人、性別不明3人）に調査票を送り、215票⁶の回答を得た（回収率29.7%）。

回答者の性別・業態・就業形態は、以下のとおりである（図表1）。性別は214人のうち、女性147人（68.4%）、男性67人（31.2%）、女性の方が、男性より高い回収率（女性31.5%、男性24.2%）を示した。年齢は45歳から52歳（平均値47.19歳、中央値47歳、最頻値47歳）、業態は男女で大きく異なり、204人のうち「現在の仕事」について、女性は調剤薬局がもっとも多く83人（59.7%）、続いて医薬品関係企業20人（14.4%）、病院・診療所17人（12.2%）がそれに続く。男性は医薬品関係企業の31人がもっとも多く47.7%を占め、続いて調剤薬局15人（23.1%）、病院・診療所7人（10.8%）の順に多い。就業形態も男女で大きく異なる。男女とも正社員が最も多いが、女性の正社員は64人（45.7%）で、パートタイマー58人、契約社員5人、派遣社員1人を併せると、非正社員も64名（45.7%）で、正社員と同じ人数になる。一方、男性は9割以上の60人が正

		女性	男性	合計
性別		147 (68.4)	67 (31.2)	214 (99.6)
業態	調剤薬局	83 (59.7)	15 (23.1)	98 (48.0)
	ドラッグストア	5 (3.6)	1 (1.5)	6 (2.9)
	病院・診療所	17 (12.2)	7 (10.8)	24 (11.8)
	医薬品関係企業	20 (14.4)	31 (47.7)	51 (25.0)
	その他企業	6 (4.3)	5 (7.7)	11 (5.4)
	官公庁	1 (0.7)	4 (6.2)	5 (2.5)
	自営業	5 (3.6)	0 (0.0)	5 (2.5)
	その他	2 (1.4)	2 (3.1)	4 (2.0)
	合計	139 (100)	65 (100)	204 (100)
就業形態	自営業	9 (6.4)	4 (6.2)	13 (6.3)
	正社員	64 (45.7)	60 (92.3)	124 (60.5)
	派遣社員	1 (0.7)	0 (0.0)	1 (0.5)
	パートタイマー	58 (41.4)	0 (0.0)	58 (28.3)
	契約社員	5 (3.6)	1 (1.5)	6 (2.9)
	その他	3 (2.1)	0 (0.0)	3 (1.5)
	合計	140 (100)	65 (100)	205 (100)

図表1 回答者の業態・就業形態（性別）（人（%））

⁶ 746人中、宛先人不明は23人であった。調査票発送後、葉書による督促をおこない合計215人から回答を得た。このうち職業に関する回答に矛盾のある1例は職業に関する解析から除外、性別に無回答の1例は性別に関する解析から除外した。

社員で (92.3%)、非正社員はわずか1名である。なお、パートタイマーの就業先は調剤薬局が23人 (65.7%) であり、男性は企業に正社員で勤め、女性は調剤薬局にパートタイマーで勤めている者が最も多い。婚姻状況と子どもの有無については、214人のうち既婚と回答した者が184人 (女性123人 (83.7%)、男性61人 (91.0%))、子どもは「いる」と回答した者が178人 (女性123人 (83.7%)、男性55人 (82.1%)) で、男女とも既婚で子どものいる者が8割以上を占め、男女に差は認められなかった。

3. 調査結果⁷

本章ではアンケート調査データから、本稿の目的である薬剤師の労働条件や職場環境と仕事内容の実態、そしてその実態に対する意識についての結果を報告する。

3.1 男女で大きく異なる年収、労働時間、研修の実態

年収⁸については、女性は「103万未満」と「700万以上」各26人 (18.4%) の両極の間の103万以上700万未満にも63.2%が分布し、80%以上が「700万以上」である男性とは大きく異なる分布を示している (図表2)。

労働時間⁹は男女とも160時間以上205時間未満が最も多く (女性44.7%、男性63.6%)、正社員が多いことと関係していると推測される。しかし男性の3割弱 (27.3%) は205時間以上の労働時間であり、160時間以上で205時間未満と合わせると90%を超える (図表3)。残業時間は女性の72.3%が10時間未満であり、20時間以下を合計すると88%となり、長時間残業をしない傾向が認め

⁷ 分析ソフトはSPSS Statistics Base ver.22および23を用い、p値が0.05未満を有意差ありとした。なお、期待度数5未満のセルが全体の20%未満であれば許容した。無回答は欠損値として扱った。自由回答のテキスト分析方法はKJ法 (川喜田1967年) を用いた。

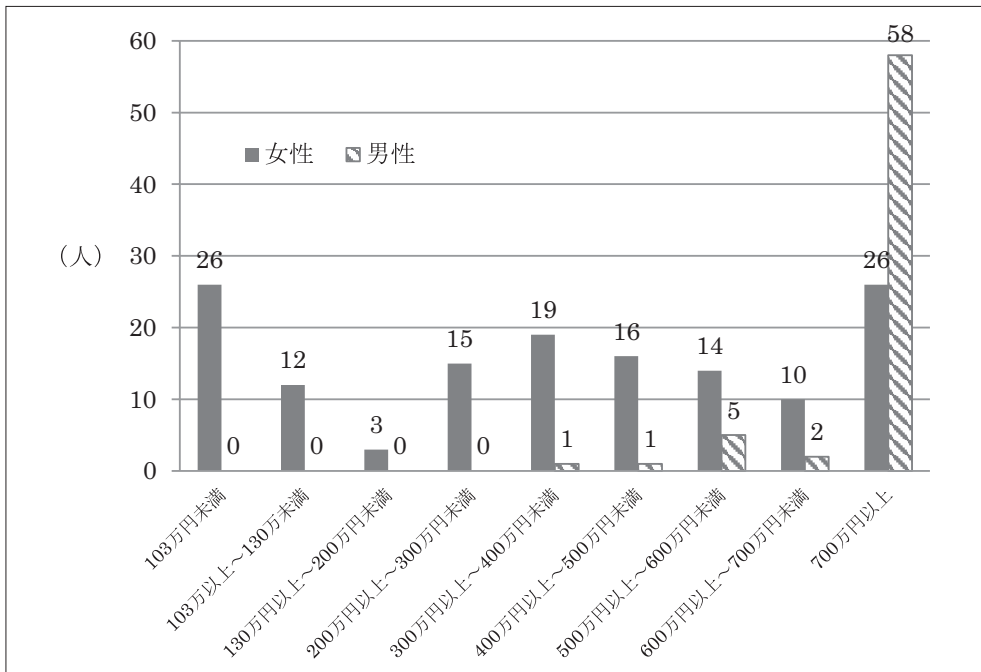
⁸ 問「昨年度の、あなたご自身の年収 (税込み、仕事による収入と仕事外の収入の合計) は、おおよそどのくらいですか。最も近い項目を1つ選択して下さい。(現在、仕事をしていない方は、最後の仕事における年収について、教えて下さい。)(項目については図表2を参照)

⁹ 労働時間の設定については以下のとおり。

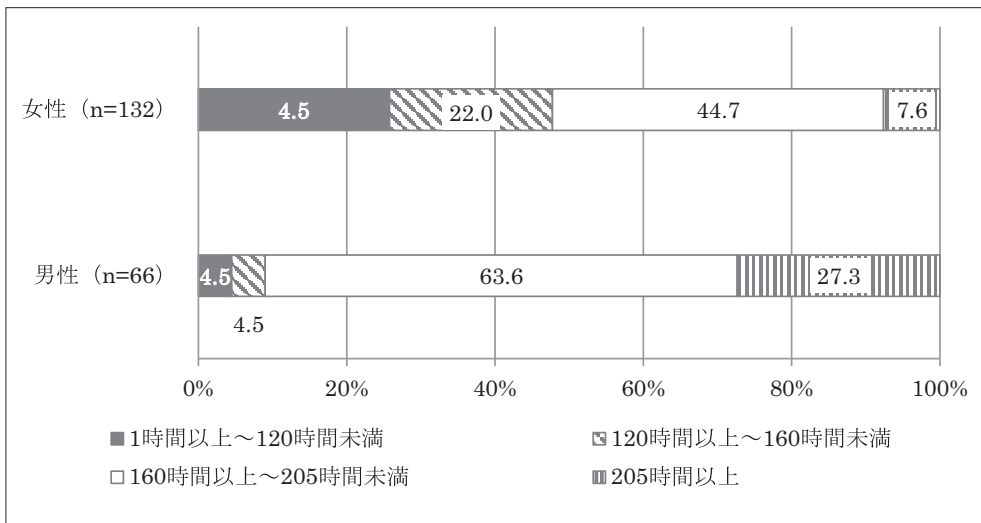
120時間/月 = 社会保険の発生する基準は正社員の3/4以上の労働時間。

160時間/月 = 労働基準法で定められた法定労働時間40時間/週 × 4週/月。

205時間/月 = 160時間/月 + 労働基準法第36条 (36協定) で定められる時間外労働延長の限度時間45時間/月。



図表2 回答者の年収



図表3 労働時間（一カ月）

られた。逆に男性の43%が20時間以上の残業をしていた（15.9%が30時間～45時間、13.6%が45時間）。

勤め先において受けた教育研修¹⁰は、男女とも「スキルアップ研修」が最も多く（女性63人（44.1%）、男性49人（73.1%））、次に、女性は「研修はない」が44人（30.8%）、逆に、男性は「管理的立場になるための研修」が36人（53.7%）と多かった。なお、管理的立場になった経験について、女性の64.6%（93人）が「いいえ」と回答したのに対し、男性の79.1%（53人）は「はい」と回答し、実際に管理的立場になるための教育研修の受講・昇格機会は、男性のほうが多いことが明らかとなった。なお、政府は「2020年までに指導的地位に女性が占める割合を少なくとも30%程度とする目標」を掲げているが、この調査対象者では、男性の79.1%、女性の34.7%が管理的立場になった経験があり、既に政府の目標は達成している¹¹。とは言え、男女の格差は依然として大きい。

3.2 高い職場環境満足度

現在の職場環境¹²について「満足」と「どちらかといえば満足」の合計（以下『満足』とする）は172人（82.7%；女性121人（83.4%）、男性51人（81.0%））と、男女とも満足度が高かった。「満足していない」と「どちらかといえば満足していない」の合計は36人（17.3%）であった（図表4）。

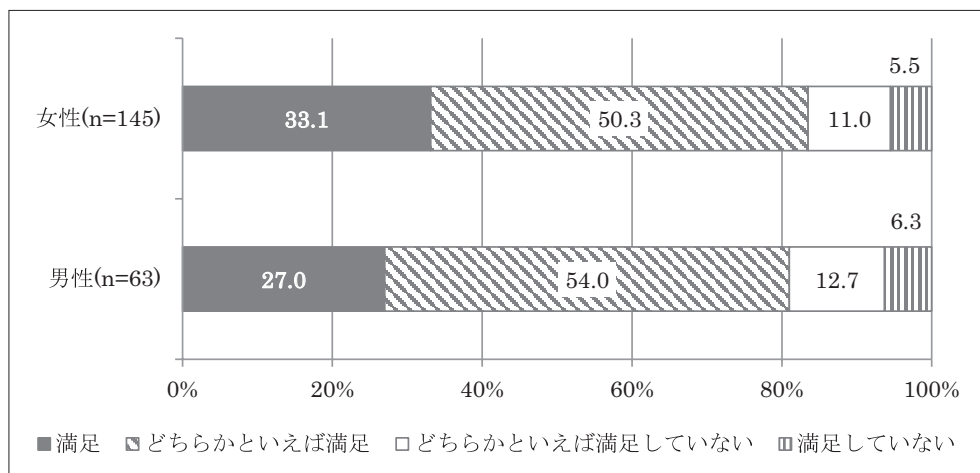
業態別¹³では職場環境に『満足』は調剤薬局82.7%（女性67人（80.7%）、男性13人（92.9%））、医薬品関係企業85.7%（女性17人（85%）、男性25人（86.2%））、病院・診療所70.8%（女性14人（82.4%）、男性4人（42.9%））等であり、病院・診療所に勤める男性以外は男女ともいずれの業態も高い満足度を示した。就業形態別では、職場環境に『満足』は正社員80.5%（女性52人（81.3%）、

¹⁰ 勤め先において受けた教育研修について、入社時、スキルアップ研修、昇格に関する研修、管理的立場になるための教育研修の有無について、複数回答で尋ねた。

¹¹ 内閣府男女共同参画局（2011年3月）「『2020年30%』の目標の実現に向けて」http://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/2020_30/pdf/2020_30_q.pdf（閲覧日：2018年7月23日）

¹² 職場環境への満足度を順序尺度（4択）で尋ねた。具体的には、問「現在の（最後に働いた職場の）職場環境に満足していますか。：満足、どちらかといえば満足、どちらかといえば満足していない、満足していない」

¹³ 問「今までに経験した仕事の状況について、下記の【選択肢】からあてはまる番号を選び下欄へご記入下さい。：調剤薬局、ドラッグストア、病院診療所、医薬品関係企業、その他企業、官公庁、自営業、その他」



図表4 職場環境満足度と性別

男性46人 (79.3%))、パートタイマー82.8% (女性48人 (82.8%)、男性0人)、契約社員83.3% (女性4人 (80.0%)、男性1人 (100.0%)) 等であり男女とも高い満足度を示した。

また、薬剤師は収入が高いか¹⁴について、女性の72%、男性の59.1%が「そう思う」と答えた。上述のように年収の実態は圧倒的に男性が高いが、薬剤師の収入が高いと考えている人の割合は男性より女性の方が高かった。

職場環境について改善してほしいこと¹⁵についての自由記述の回答者は53名 (24.7%；女性38人、男性15人) であり、職場環境に『満足』している人の割合が高いため、改善してほしいことは未記載が多かったのではないと思われる。記載された内容の中には、男女とも「人手不足」に関する記述が最も多く18人 (女性10人、男性8人)、「人手不足」およびその結果であると考えられる「休みが取りにくい」の二項目のいずれかを挙げた人の合計は53名中25人 (48.0%；女性17人、男性8人) で、続いて女性は「設備 (空調やパソコン等) (18.4%)」、男性は「人間関係 (20.0%)」の記述が多かった。「人手不足」と答えた割合が最も高かった業態は、調剤薬局の11人 (女性8人、男性3人)、次

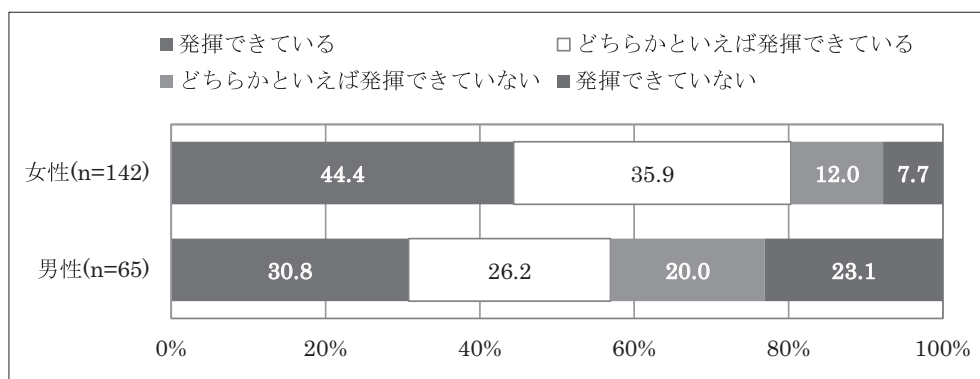
¹⁴ 薬剤師は収入が高い、についての意識を順序尺度 (4 択) で尋ねた。具体的には、問「薬剤師について、あなたが思うことに最も近いものを、下記【選択肢】から1つ選び空欄へご記入下さい。収入が高い：思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、思わない」

¹⁵ 問「職場環境について改善してほしいことがある場合は、教えて下さい。(自由記述)」

が企業の4人（女性1人、男性3人）であった。なお、「職場環境に満足」と答えた3人のうち2人も「職場環境について改善してほしいこと」に「人手不足」を挙げており「人手不足」は職場環境の満足度に関係なく、改善要望項目として言及されていた。

3.3 薬剤師の職能

自分自身の現在の、あるいは最後に働いた仕事で薬剤師の職能を発揮できているか¹⁶について、男女とも「発揮できている（女性44.4%、男性30.8%）」が最も多かったが、女性に比べて男性は「発揮できていない（23.1%）」の割合が有意に高かった（調整済み残差 3.1, $p < 0.05$ ）（図表5）。この差は、既に述べたように男性の多くが薬剤師免許を必要としない仕事に就いていることを反映していると考えられる。



図表5 職能発揮と性別

薬剤師という職業についての意識を尋ねたところ、男女の多くが、技能を必要とし（女性93.0%、男性91.0%）¹⁷、精神的ストレスが大きい（女性76.3%、男性70.8%）¹⁸職業と考えていた。他方、人を動かす力が強いと考える人は少な

¹⁶ 問「現在（最後に働いた職場の）、仕事で薬剤師の職能を発揮できていると思いますか。最も近いと思われる番号を1つ選択して下さい。：発揮できている、どちらかといえば発揮できている、どちらかといえば発揮できていない、発揮できていない」

¹⁷ 薬剤師は、技能を必要とするかについての意識を順序尺度（4択）で尋ねた。

¹⁸ 薬剤師は、精神的なストレスが大きいについての意識を順序尺度（4択）で尋ねた。

く（女性18.4%、男性25.8%）¹⁹、薬剤師が仕事のやり方を自分で決められるかどうか²⁰については「どちらかといえばそう思わない」と回答した者の割合は、男性で51.5%（34人、調整済み残差 2.3, $p < 0.05$ ）であり、女性34.5%（49人）に比べて有意に高かった（図表6）。特に男性に、薬剤師の仕事の裁量性が低いと認識する傾向が強いことがうかがえる。また、薬剤師を生まれ変わってもやりたい²¹と「思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計（以下『思う』とする）は、女性56.1%、男性43.3%であった。

			女性	男性	合計	χ^2
仕事のやり方	思う	人 (%)	19 (13.4)	3 (4.5)	22 (10.6)	p < 0.05
		調整済み残差	1.9	-1.9		
	どちらかといえばそう思う	人 (%)	51 (35.9)	16 (24.2)	67 (32.2)	
		調整済み残差	1.7	-1.7		
	どちらかといえばそう思わない	人 (%)	49 (34.5)	34 (51.5)	83 (39.9)	
		調整済み残差	-2.3	2.3		
思わない	人 (%)	23 (16.2)	13 (19.7)	36 (17.3)		
	調整済み残差	-.6	.6			
合計	人 (%)	142 (100)	66 (100)	208 (100)		

図表6 仕事の裁量性（仕事のやり方を自分で決められると思うか）（人（%））

3.4 仕事内容の満足度は高いが、自己評価は低い

仕事内容満足度²²は男女とも『満足』が8割を超えた（女性84.7%、男性81.5%）（図表7）。

次に、職能発揮と仕事内容満足度について検討した。職能発揮については「発揮できている」と「どちらかというと発揮できている」の合計を『発揮できている』、「発揮できていない」と「どちらかといえば発揮できていない」の合計を『発揮できていない』とし、結果を図表8に示した。女性は『満足』かつ『発揮できている』が69.0%、『満足』かつ『発揮できていない』が15.5%、『不満』かつ『発揮できていない』は4.2%であった。男性の『満足』かつ『発

¹⁹ 薬剤師は、人を動かす力が強いについての意識を順序尺度（4択）で尋ねた。

²⁰ 薬剤師は、仕事のやり方を自分で決められるについての意識を順序尺度（4択）で尋ねた。

²¹ 薬剤師は生まれ変わってもやりたい、についての意識を順序尺度（4択）で尋ねた。

²² 仕事内容についての満足度を順序尺度（4択）で尋ねた。具体的には、問「現在の（最後に働いた職場の）仕事内容に対する満足度について、最も近い番号を1つ選択して下さい。：満足、どちらかといえば満足、どちらかといえば満足していない、満足していない」

		女性	男性	合計	χ^2
仕事内容満足度	満足	38 (26.4)	13 (20.0)	51 (24.4)	n.s. p=0.519
	どちらかといえば満足	84 (58.3)	40 (61.5)	124 (59.3)	
	どちらかといえば満足していない	15 (10.4)	6 (9.2)	21 (10.0)	
	満足していない	7 (4.9)	6 (9.2)	13 (6.2)	
	合計	144 (100.0)	65 (100.0)	209 (100.0)	

図表7 仕事内容満足度と性別 (人 (%))

		仕事内容満足度 (女)		仕事内容満足度 (男)	
		『満足』	『満足していない』	『満足』	『満足していない』
職能発揮	『発揮できている』	98	16	32	5
		69.0%	11.3%	49.2%	7.7%
	『発揮できていない』	22	6	21	7
		15.5%	4.2%	32.3%	10.8%
合計		120	22	53	12

女性 p=0.333、男性 p=0.237

図表8 職能発揮と仕事内容満足度 (人)

『発揮できている』は49.2%と半数以下であり、『満足』かつ『発揮できていない』は32.3%と女性に比べて多く認められた。有意差はないものの、女性は仕事内容に満足であるほど薬剤師としての職能を発揮している割合が高いのに対し、男性は女性ほど職能発揮度に差がみられない。女性の約6割が調剤薬局に勤務しているのに対し、男性の多くが薬剤師免許を必ずしも必要としない仕事に就いているという業態の違いが影響し、「薬剤師としての職能発揮度」は自ずと異なる結果となったと思われる。

薬剤師の技能と仕事内容満足度について、技能を必要と『思う』かつ『満足』は女性113人(80.1%)、男性48人(73.8%)であった。薬剤師は精神的なストレスが大きいか、について『思う』は女性106人(76.3%)、男性46人(70.8%)と7割以上がストレスが大きいと考えていたが、薬剤師のストレスと仕事内容満足度について、ストレスが大きいと『思う』かつ『満足』は女性87人(63.5%)、男性35人(55.6%)であった。男女とも仕事内容満足度は高いが、薬剤師は技能が必要でありストレスが高い仕事と考えていることがわかった。

仕事内容満足度を検討した結果、薬剤師を生まれ変わってもやりたいと『思

う』かつ『満足』は女性50.3%、男性38.5%、『思わない』かつ『満足』は女性34.3%、男性43.1%であった（図表9）。男性は薬剤師を生まれ変わってもやりたい意識と仕事内容満足度が関連していなかった（女性 $p=0.069$ 、男性 $p=0.161$ ）。これについても、男女の主要な業態の違いが影響していると思われる。

		仕事内容満足度（女）		仕事内容満足度（男）	
		『満足』	『満足していない』	『満足』	『満足していない』
薬剤師を 生まれ変わっても やりたい	『思う』	69	8	25	3
		50.3%	5.8%	38.5%	4.6%
	『思わない』	47	13	28	9
		34.3%	9.5%	43.1%	13.8%

女性 $p=0.069$ 、男性 $p=0.161$

図表9 「薬剤師は生まれ変わってもやりたい」と仕事内容満足度（人）

「薬剤師の社会的な評価について、思うこと」²³の自由記述の回答者は140名（65.0%；女性91人、男性49人）であった。薬剤師という職業自体の評価については、薬剤師の社会的な評価が高いとする女性は38.5%であるのに対し、男性は12.2%に止まっていた。また、男性は51.0%が「医療者の中での評価が低い」と記述したが、女性は37.4%であった（図表10）。同じ問いである「薬剤師の社会的な評価について、思うこと」を薬剤師自身の自己評価の観点から再分類した結果、薬剤師としての自己評価は低いことを示す記述が多くを占めていた（女性62.6%、男性67.3%）（図表11）。

生活における仕事の位置付け²⁴は、男女とも新卒就労前は「仕事も頑張りたいが家庭生活や個人生活も大事にしたい（女性57.0%、男性57.6%）」、「仕事に優先的に取り組みたい（女性37.3%、男性39.4%）」の順に希望が多かった。現在の希望は「仕事に優先的に取り組みたい」が男女とも新卒時より30%以上減り（女性4.9%、男性6.2%）、「仕事も頑張りたいが家庭生活や個人生活も大事

²³ 問「薬剤師の社会的な評価について、思うことを教えてください。（自由記述）」

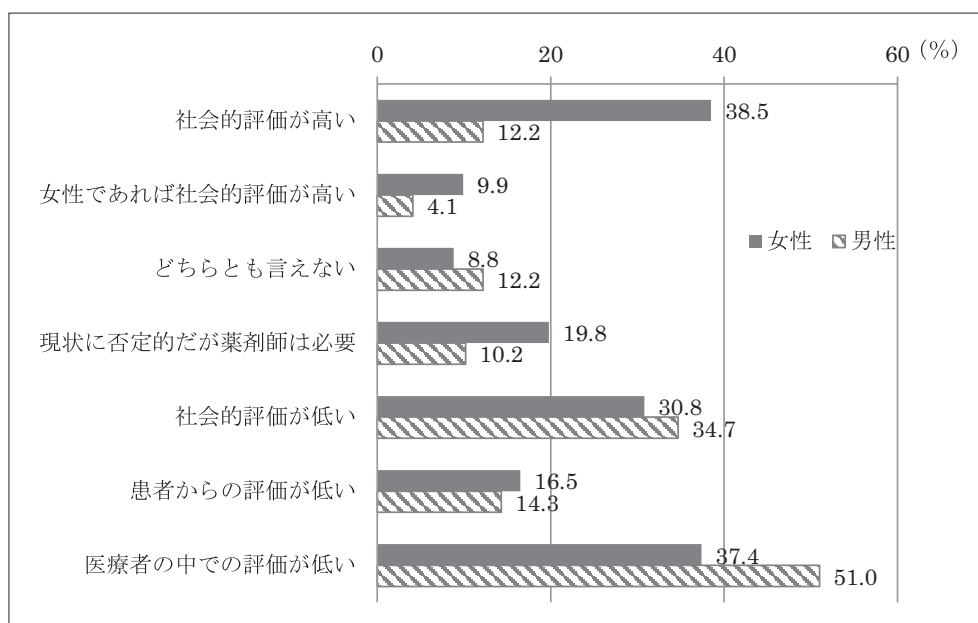
回答から、KJ法により、薬剤師の社会的評価および薬剤師としての自己評価に関する記述を抽出・分類した。

²⁴ 問「生活における、仕事の位置付けについて、下記【選択肢】から最も近いと思われる番号を1つ選び空欄へご記入下さい。：仕事に優先的に取り組みたい、仕事も頑張りたいが家庭生活や個人生活も大事にしたい、仕事より家庭生活や個人生活が優先だ、仕事はやりたくない」

にしたい」が10%以上増加した（女性67.4%、男性73.8%）。ところが、現在の希望に対し、現実の状況は「仕事より家庭生活や個人生活が優先」である女性が10.2%高く34.5%に、「仕事に優先的に取り組みたい」男性は15%高く21.2%となり、現実には、女性は仕事より家庭生活や個人生活を、男性は仕事を優先させている傾向が認められた（図表12）。

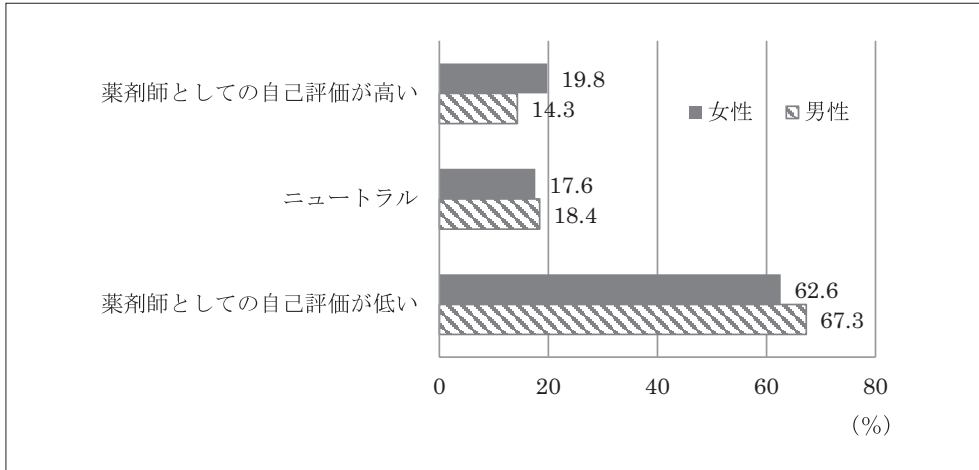
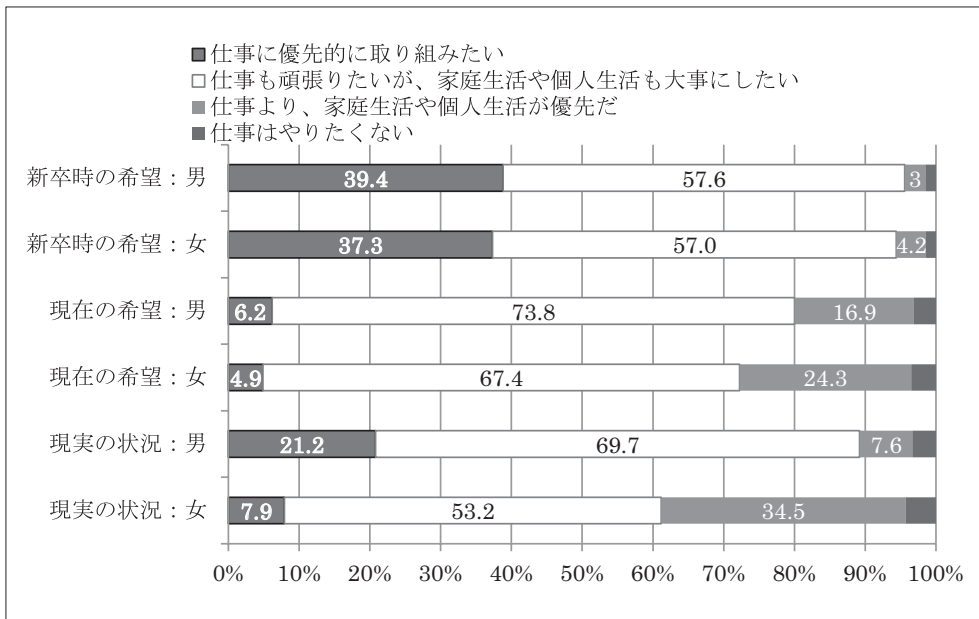
なお、新卒就労前の希望が変化した理由²⁵として、女性は「子育て（58人（73.4%）」、男性は「結婚（15人（46.9%）」を最も多く挙げた。

生活における仕事の位置付けから、新卒就労時に仕事に対する意欲を持つ女性の割合は男性と同様に一定程度認められたものの、現実の生活では女性が育児について主に負担するという性別に依存した分業が行われている様子がうかがわれる。



図表10 薬剤師の社会的な評価と性別²⁶（女性n=91、男性n=49）

²⁵ 問「「新卒就労前の希望」と「現在の希望」の回答が一致していない人にお伺いします。希望が変化したきっかけを教えてください。（複数回答可）：結婚、出産、子育て、介護、進学、仕事以外のことに目標ができた、仕事に目標ができた、仕事における処遇に希望が持てないから、その他」

図表11 薬剤師としての自己評価と性別²⁷ (女性n=91、男性n=49)

図表12 生活における仕事の位置付け

²⁶ 各項目の回答例 (一部抜粋) は次のとおり (意味の解る項目は記載なし): 「女性であれば社会的評価が高い: 主婦でパートで働くには、神経は使うけど、時給は高めだし知的な感じで見られる」、 「現状に否定的だが薬剤師は必要: 今現在の評価は、厳しく (中略) 患者様の立場に立って、また、他職種の方に必要な情報もきちんとそえられるようにならなければ、自己満足の一人相撲にすぎない」、 「社会的評価が低い: 国家資格でありながら職域や権限が明確化されておらず迷走」、 「医療の中での評価が低い: 医療の場では立場が低い」。

4. 考察

ここでは、3の集計結果から見えてくる薬剤師の職務の実態と意識から、薬剤師は現状においてどの程度仕事に満足しているのか、薬剤師が本来の専門性を十分に発揮できているのか、また、専門性を発揮できていないとしたら、その背景にはどのような実態や意識があるのか、そして薬剤師が本来の専門性を発揮するためにはどのような課題があるかを考察する。

この調査により以下の知見が得られた。薬剤師は①男女で業態と就業形態が大きく異なる。②女性は男性に比べ年収が低い傾向にあり、教育研修の機会も少ない。③男女とも職場環境についても仕事内容についても満足度は高い。④女性は職能を発揮するほど仕事内容に満足である割合が高かったが、男性には女性ほど顕著な傾向はみられない。⑤薬剤師という職業の社会的評価についての判断は男性より女性の方が高いが、男女とも薬剤師としての自己評価は低い傾向が見られる。⑥仕事の裁量性については特に男性に、薬剤師の仕事の裁量性を低いと認識する傾向が強く見られる。また、⑦薬剤師を生まれ変わってもやりたいと思う割合は女性で半数以上、男性4割強である。⑧新卒時の仕事への意欲はその後の人生において変化し、結婚を機に男性は一層仕事を優先し、女性は特に子育てによって家庭重視に変化している。

これらの結果は、それぞれに矛盾した内容を含んでいるが、相互に関連しているのではないかと考える。以下にその理由を述べる。

まず第1に、薬剤師という女性の多い専門職においても、他の多くの職業同様の男女の違いが見て取れる。男性は、ほとんどが正社員であるが、女性はパート等非正社員が多い。長時間の残業が多い男性に比べて女性の労働時間は短い。研修についても男性には管理的立場になるための研修の機会が女性より多く、女性の中には研修自体がない、という回答も30.8%とかなりある。今回の調査対象者は大多数が既婚で子どものいる人たちであり、薬剤師のような専門職であっても男性は仕事、女性は家庭という性別役割分業に適合的な働き方

²⁷ 回答例は次のとおり（一部抜粋）「薬剤師としての自己評価が高い：在宅など、薬剤師の活躍できる場が増えると思われ・期待されている」、「薬剤師としての自己評価が低い：評価が低いし、それについて致し方ないと思う部分もある」、「ニュートラル：社会の役割の1つとして適当な評価を受けている」。

になっていることがうかがわれる。

しかし職場環境についての満足度は男女とも非常に高い傾向が見られる。男女とも業態、年収に関係なく高く、「職場環境について改善してほしいこと」との問いに対し未記入が多かったことから、職場環境をあまり不満に思っていないことが推測される。

また、薬剤師の仕事内容について、特に男性は仕事のやり方を自分で決められると思わないと回答した割合が有意に高かったことから、現状においては専門職としての職能が従属的なものにとどまっていると考えられていることが推測される。

女性の場合は、生活における仕事の位置付けが、新卒就労前から変化した理由から、現実の生活では家庭責任が女性に偏る傾向が強く、特に子育ての負担が大きいとわかる。しかし女性は、薬剤師を生まれ変わってもやりたいと考える割合が、男性より高い。

男性の4割以上は、仕事内容に満足でも薬剤師を生まれ変わってもやりたいとは考えていない。また男性の場合、薬剤師免許が必ずしも必要ではない企業に勤めている割合が高く、薬剤師として働いていない。薬剤師の仕事は従属的であり裁量が発揮できないと考える傾向も、医療者の中での薬剤師の評価が低いと考える傾向も、特に男性に顕著である。以上の結果は、男性が薬剤師の専門性を十分に評価していないことのあらわれではないか。

一方女性は男性に比べて賃金も低く、研修や昇進の機会も少なく、非正規が多いにもかかわらず、男性以上に職場環境にも仕事内容にも満足度が高い。このことは家庭を優先する働き方を女性自身が受け入れ、それだけ職場環境に多くを求めていることのあらわれかもしれない。現状においてはやむを得ない実情があるとはいえ、女性自身もまた、薬剤師の仕事を低く評価していることを示しているのではないだろうか。

もし、調剤薬局の仕事の専門性を薬剤師自身が低く評価しているとすれば、薬剤師の専権事項である「調剤²⁸」（日本学術会議 2014：2）自体が評価されていないということになる。

薬剤師の成立の歴史をみると、薬学の世界において、調剤など医療実務に特化した薬剤師は薬学界全体からは軽視されてきた（山川 2009：90）。その医療実務に特化した薬剤師として、女性に白羽の矢が立ち、薬剤師は家で薬局を営

みながら家事育児も出来る、女性には非常に良い仕事とされ、医療実務に特化した薬剤師という仕事を女性に推奨してきた背景があったことがわかる（天野 1978：122；宮本 1990：75）。

他方、明治時代より薬学研究は薬学界全体から見ると花形という歴史的な流れが次第に形成されてきた（山川 2009：90）。日本薬学を形作った薬学研究者には男性の名が並ぶ。

これらの歴史的流れを受け、薬学研究者以外の薬剤師は家事・育児との両立がし易く、時給が高い「女性に良い職業」として魅力が残り、現在に至っていることが推測された。

薬剤師は家庭と両立できる女性に適した職業という一般化²⁹された薬剤師像自体にも問題があったのではないか。こうした薬剤師像は本来発揮すべき専門性の阻害要因として機能してきたといえるのではないだろうか。本研究の調査結果は、こうしたジェンダー化された薬剤師の歴史が現在に受け継がれていることを示しているのではないかと考えられる。

現在の薬剤師業界の特徴として、薬剤師は薬剤師免許という国家資格を持つため、調剤薬局の正社員やパートとして再就職しやすく、実際に再就職先として調剤薬局を選ぶことも多い。事実として日本の薬剤師は女性が多く、その大半が調剤薬局に勤めている。一般の人が薬剤師として思い浮かべるのは、日頃から薬を貰う調剤薬局の薬剤師ではないだろうか。薬剤師の社会的役割を考えると、調剤薬局の業務を担う女性薬剤師を抜きに語ることは出来ない。

実際に調剤薬局において育児や介護と両立して働く女性薬剤師はほとんどがパートタイマーであり、労働環境の問題点として人手不足にもかかわらず、職場環境に満足している比率が高い理由も、忙しい家事の合間に家計補助的に高

²⁸ 調剤は薬剤師法第19条において一部の例外を除き「薬剤師でない者は、販売又は授与の目的で調剤してはならない」と、薬剤師の専権事項と規定され、薬剤師法第24条に規定された疑義照会義務と併せて、医療における薬剤師の重要な職務の一つとなっている。日本学術会議（2014年1月20日）「薬剤師の職能将来像と社会貢献」<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t184-1.pdf>（閲覧日：2016年10月23日）

²⁹ 「薬学科への女子の集中は、薬剤師に対する需要の増大だけではない。女子の特性とみなされていた精密さや緻密さが、薬剤を取り扱うのにふさわしく、さらには当時は婦人職業の多くは家庭と両立しにくかったので、育児や家政と両立できる薬剤師（薬局経営）は婦人にとって優れたものであると認識されていたことに深く関わっている（天野 1978：122；宮本 1990：75）」という指摘がある。

時給で働く女性薬剤師が多く、仕事より家庭が優先されるため、職場環境に多くを求めている可能性がある。

薬剤師の価値の高さは、職業としての威信ではなく、家庭責任を多く担う場合（特に女性）にとっての都合の良さを示しているのではないだろうか。これは性別枠組みの中でのエリートである可能性を示唆している。「良い薬剤師＝家庭責任が女性に偏る傾向を是とする薬剤師」という規範がその背景に存在している可能性は否定できない。そうであるならば、昨今の薬剤師の専門性を活かそうという取り組みと薬剤師当事者の意識実態にはかなりの乖離があるのではないだろうか。

ジェンダー化された職業意識の結果、薬剤師は「男が生涯をかける仕事ではない」「女性が（結婚後に、家事の傍ら高時給で小遣い稼ぎできる仕事であり）真剣に取り組む仕事ではない」という意識が、現在の薬剤師のあり方に反映されたとすれば、その結果として薬剤師の男女ともが真剣に仕事に取り組まないということになってしまう。「裁量の効かない」「下請け的な技術職」ととどまり満足するという薬剤師職の限界は性別役割分業をその要因としているのではないだろうか。

おわりに

本稿は、薬剤師に対して今まで詳細に調査されなかった労働実態および職場環境や仕事内容についての意識についての調査を行いジェンダー視点からの検討を行った。その結果、薬剤師の職場環境や仕事内容への高い満足度は、必ずしもこの専門職の高い評価によるものではなく、むしろ薬剤師の評価は低いことがわかった。その要因には性別役割に従い家庭役割を優先させるジェンダー化した女性薬剤師のあり方があるということが重要な知見であったと考える。

今後、更なる社会貢献に資する薬剤師の社会的な存在位置は、患者と医療の専門家の双方向に医薬品を通じて情報提供が出来る薬学的根拠を持った「(薬に関しての)患者と医療の専門家の媒介者」ではないだろうか。患者から見ると、薬剤師は医師とは異なる観点から医薬品について相談できる医療の専門家であり、医師に対し処方内容について疑義照会を行うことも出来る。薬について患者の要望に応え、医師の疑問に答えることが出来る医療の専門家として、

従属的ではない自立した専門性を持った存在になりうるのである。

また、今後は在宅医療など薬局から一歩出て患者のところへ「出かけて行く」ことによって「媒介」の役割を果たすことも重要になってくるだろう。このような薬剤師としての新しい展開を意欲的に考えることにより、社会でより一層必要とされる存在になるものと思われる。

日本の薬剤師の社会的存在意味は過渡期にある。どのような方向に進むのかは今までの歴史をふまえ、今後の政策、薬剤師各々の意識などが複雑に絡みあって作り上げられていくであろう。

今回の調査対象者に対し、若い世代の薬剤師あるいは6年制を卒業した薬剤師の現状や意識は異なっているものと思われる。特に女性薬剤師像を作ってきたジェンダー意識は大きく変化している可能性がある。若い世代との比較研究は今後の課題としたい。

【参考文献】

- 天野正子（1978）「第一次世界大戦後における女子高等教育の社会的機能」『教育社会学研究』第33集：118-131.
- 川喜田二郎（1967）『発想法』。中央公論社
- 中込啓一，亀谷俊彦，深井克彦，山田奈穂子，菅野敦之（2009a）「保険薬剤師就業調査——大手調剤薬局薬剤師の意識」『日本薬学会年会要旨集』129th.4号：160.
- 中込啓一，亀谷俊彦，深井克彦，山田奈穂子，菅野敦之（2009b）「保険薬剤師就業調査——雇用形態、性別、婚姻状況別による違い」『日本医療薬学会年会講演要旨集』巻19：268.
- 中込啓一，亀谷俊彦，深井克彦，山田奈穂子，菅野敦之（2010）「保険薬剤師就業調査——自由記述での職場選択、不満、転職理由」『日本医療薬学会年会講演要旨集』巻20：494.
- 宮本法子（1990）「薬剤師の専門職化」『東京薬科大学一般教育研究紀要』第10号：75-83.
- 山川浩司（2009）「日本の薬学、薬剤師教育の150年——過去・現代・未来——」『薬史学雑誌』44(2)：88-94.